

小西信八の業績を考える

司 会／ 新谷嘉浩（京都・日本聾史学会運営委員）
パネラー／ 伊藤政雄（東京・日本聾史学会会長）
中根伸一（北海道・日本聾史学会副会長）
佐藤 聖（新潟・日本聾史学会運営委員）
記 録／ 新谷嘉浩



小西 信八 (1854～1938)

1 ■長岡市出身の小西信八

私は長岡で生まれ育ったのですが、小西信八（以下、小西と略）について無知蒙昧でした。横尾義智氏の調査の過程で、小西を知るようになり、金子進太郎、多田眞佐雄、丸山浩太の存在が判明した。

長岡盲啞学校創立には、必ず小西が関わっており、切っても切れない存在であることがわかった。しかも小西が長岡出身であったことには驚いた。

小西に関する情報を提供したい。今、長岡の聴者たちは、この本『ふるさと長岡の人びと』で小西を紹介しているが、盲教育中心に書かれています。しかし、聾者関係はほんのわずか。つまり聴者は手話がわからないことで、聾教育に疎く研究調査に行き詰っている様子がわかります。（佐藤）

2 ■聾教育の視点から小西の業績

今まで北海道は戦前、聾啞教員は2人だけと聞いていました。調査を進めると新たに1人、又新たに1人と次々と判明しました。さらにその聾啞教員方の動向などを調べると小西が命令してその

聾学校へ派遣させていることがわかったのです。ほとんどの聾先生たちは小西と関わっていたのです。小西はどんな人なのか？本や資料を集めて読んでみました。わかったことを幾つかあげて説明します。

①「日本のペスタロッチ」と呼ばれた小西信八

小西は「日本のペスタロッチ」と呼ばれていました。ペスタロッチという世界的有名な教育家の考え方を日本で初めて普及させたのが小西だったのです。盲啞教育だけでなく白痴教育を実施させたり、明治前期に幼稚園を創設したのも全て小西と結びつくのです。それぐらい有名な人だったのです。

②小西信八が遺した遺産

北海道における聾啞教員の派遣異動はほとんど小西によってなされていました。北海道だけではなく、他の都府県はどうでしょう？まだ調査の段階ですが、研究報告を聞く範囲で、ほとんどの聾啞教員たちが小西によって日本各地へ異動させられたことがわかりました。

つまり、聾啞教員たちや手話法で教授する聴者の先生たちが全国各地へ派遣された理由の一つが日本手話の統一です。小西が養成した聾啞教員や聴者の先生を各地の聾学校へ奉職させ、別の聾学校を転々し、そこで手話を浸透させて日本手話を普及させた功績はすごく大きく、小西が残した大きな遺産でもあると思うのです。

小西が辞めた後、昭和に入って全国的に口話教育が広まった時、聾啞教員たちは退職させられました。聾啞教員たちから学んだろう生徒たちは、その手話を引き継ぐ後輩たちがおらず、逆に口話を学んだ後輩たちは自分たちで独自に手話を作っていた。そのため、地方によって手話がバラバラに違うのです。言わば、口話法の導入により、手話が地方ごとに違うようになったと思います。導入前は東京聾啞学校師範科（先生になるための学校）の卒業生たちが全国各地に配置されたので、手話もほとんど同じではないかと思う。

③小西を批判した川本宇之介

小西を批判した川本宇之介をご存知ですか？川本口話賞を貰った人、居ますね。話を戻して、川本宇之介が著した厚い本『聾教育学精説』を読んでもみると、明らかに小西を批判しています。小西は手話法に賛成で口話法に反対の考え方を持っている。その考え方は間違っていると書いてありました。口話導入後、小西は悪役にでっち上げられたのです。それが全国に広まり、小西の功績だけでなく名前までが自然消滅したのです。

実際に調べてみると口話反対ではないことがパワポイント『小西の生涯』を見て明らかです。口話教育も必要だけど・・・だからといって手話を排除していいのか？迷っている。

④教員の教育に対する考え方

全国各地に聾学校を創設するために各地へ懇願している。あの時代は生活が苦しかった。聾学校設立運動するにも資金がない。政府の考え方は自分で設立せよと放任主義だった。

師範科卒業生は聾学校を創設し、給料が安くても聾生徒に教育を施すことが一番であり、給料の高い安いといった塩梅で子供たちに教育を施すなど小西は教え続けました。

実際、聾教育者たちや聴者の先生、盲学校の先生たちは給料が安くても教育を第一とし、自分たちの給料から生徒たちに食わせてあげている。小西の考え方がいかに普及していることが伺えられます。

小西の考え方を読んでみると貧しくても構わない。食っていくために教えるのではない。教育のために食っていく。普通の学校の先生は食っていけないなら、先生を辞めるという考え方でしたが、小西は食っていけなくても教育を第一とせよ、学校を創設し、たくさんの生徒と共に学べるように願っていたのです。

⑤明治40年代の聾学校設置における事情

明治時代、聾学校の創設数が一番多かったのはいつですか？明治41～42年ごろです。その頃はピークで全国的に聾学校が一斉にたくさん設立したのです。理由の一つは、小西は全国各地にある師範学校（先生になるための学校）の附属小学校に聾の教室を設置するよう文部省に働きかけました。試験的に1年間、附属小学校に聾学級を開き、教員を派遣し教育を始めたが、予算がなく1年で閉鎖となった。そこで教えていた先生は生徒たちを放っておく訳にはいかず、附属小学校を辞めて、民家を借りて、自分で聾学校を設置し、生徒たちを呼んだというケースが多く見られます。全国的に見て、小西の評価を高くみています。

⑥手話法と小西

大正まで聾学校は一部口話法ありましたが、全国的に手話法でした。小西が退職した後、口話法が全国に広まりました。手話禁止で年輩の聾者にきくと手話で話すだけで手を叩かれたという証言もあります。

小西は手話法論者ではなかったけど、黙認してくれたおかげで、全国的に手話がひろまった。このことを高く評価しています。（以上、中根）

⑦小西信八の業績

小西の業績について、2人が話した内容とほぼ同じです。聾教育の裏に関する資料を読むと意外な事が書いてありましたが、この事をまとめた本がないのです。つまり、『聾哑界』『聾哑教育』など戦前に発行された雑誌には小西を褒め称える文章や批判などが書かれていますが、一部ずつしか見られないのです。

小西は聾教育だけでなく盲教育にも大きな誇りを残した事に高く評価しています。又、昔、精神障害者の教育は、学年が上るにつれて、学力が段々低下するなど困難を極めました。小西は盲教育だけでなく、精神障害者教育にも熱心に研究をすすめていました。

又、孤児（家族から棄てられた子供や犯罪を犯した親を持つ子供など）を養育することで社会が美化していくという論文を残されています。

明治30～40年ごろ、盲聾学校で盲児と聾児の両方を見ている立場だったので、ある意味では広視野で教育を見ることができました。小西は明治時代において、先覚的な考え方を持っていたのです。普通考えられないことを小西が発案して、いろいろ研究に熱心でした。今まで小西が考えた教育とは何か？を改めて見つめたいと思います。

（伊藤）

3 ■小西信八と山本五十六

山本五十六海軍元帥（以下、山本と略）と小西の関係はどうだったのでしょか？小西は盲聾教育家、山本は軍人と別々の道を歩みました。小西と山本はお互いに顔を知らなかったのでしょうか？とんでもない！とても大親友だったので！お互いに文通や交友を深めていたのです。

増してはつきり証明できます。昭和13年、東京聾哑学校（現・筑波大学附属聾学校）でのことです。前に校長を務めていた小西が退職のあと、亡くなられたのは昭和13年でした。

小西が校長を務めていた時、小高い丘のあたりが文京区（昔は小石川区）で東京聾哑学校があり、丘を降って草むらの向こうに有名なお寺がありました。そのお寺の名前は「伝通院」といいます。

私（伊藤）が戦争前、幼稚部（当時は予科）に入学する頃、口話教育を受けていました。休憩の

時間に家々が見える柵のところまで駆け抜けました。向こうに寺が見えて、見晴らし風景がとてもきれいでした。今はビルだらけ！とてもじゃありませんが……。そこは丘の上から寺が見えるので、私は将来聾啞学校の校長先生になりたいとばかばかしい夢をもてるような場所でした。

小西も手を柵にもたれて「いずれ私が死んだら、あの寺に運んでもらいたいなあ。あの場所だったら、お墓に入ったら、聾啞学校の校舎を見続けることができるよ。」

小使いの人「ああ、そうですか……。失礼ですけど、あの寺とはどんな関係がありますか？」

小西「いやいや、関係ないよ。もし、献体したらすごくお金がかかるよ。有名な人でないと無理だよ」と冗談まじりで話し合っていました。「伝通院」はそれぐらい有名な寺なのです。

その後、小西は校長を退職し、老衰で亡くなられました。昭和13年のこと。

「そう言えば、小西校長はあの寺で葬儀をあげてほしいと言われたことを覚えています。」

早速、伝通院に電話で葬儀をあげて良いかどうかを問い合わせしました。

伝通院「東京聾啞学校校長・小西信八さんならよくご存知でした。生前によくお会いしましたよ。素晴らしい人物でした。」本当は宗派が違いますが、特別に葬儀をあげてもらおう許可を得ました。そこで葬儀を開くこととなった訳です。

葬儀が開会された時、私（伊藤）は初等部1、2年でした。小西の遺影を見て、先生が口話で「この方はえら〜い」と言ったのですが、よくわかりませんでした。「亡くなった」と言われてもピンときませんでした。葬儀のとき、みんなは行儀よくしていたのですが、葬儀には初等部1年以上の学生が弔問しました。私は小さかったのでよくわからなかったのです、その辺で遊んでいました。

弔問客の中に一人、海軍帽をかぶりたくさんの勲章のついた軍服を着た軍人さんが現われたのです。「あの方はだれ？」とざわついていると「あの有名な山本五十六元帥だ！」そう、小西の葬儀に山本元帥が弔問されたのです。小西と山本は生まれ故郷が同じ長岡であり、共に仲が良かったのです。

4 ■山本五十六の逸話

話ごとびますが、夏休みのこと。ある聾啞学生が長岡聾啞学校にある大きな木の影で避暑ながら将棋をやろうと友人を誘いました。友人と約束して、長岡聾啞学校で待ち合わせしました。夏休み中でしたから、当然だれもいません。宿直でいた先生に許可をもらって、2人は木の影に座って将棋盤を開き、将棋を指しました。

対局中、向こうのドアが開き、男の人が出てきてこっちへ向かいました。2人は一瞬男性を見つ

めましたが、お互い知らない人でした。その男性は丸坊主で浴衣に帯を巻いて、背を丸めながらゆっくりこちらへ向かっているのです。そして、対局中の将棋盤を優しい笑顔で見つめました。腕を組み、納得したようにうなずき、将棋の駒を一手すすめました。

「勝手に将棋の駒を動かすなんて！甚だ迷惑だ！」睨みつけましたが、その男の人は掌を差し出して「見てください」と言わんばかりでした。すると対局相手は青ざめた顔で「もう王手！次の一手で負けてしまう！」。もうあたふたでした。

その男の人は余裕しゃくしゃくで、対局相手に駒を出して見せ、将棋盤を指しました。するとどうでしょう！！大逆転され、自分が王手に掛かっていたのです！！すっかり自分も青ざめてしまったのです。

この話は本当です。その男の人は山本五十六だったのです。今から40年前、長岡に来たとき、近くに住んでいたろう者2人から話を聞きました。山本五十六が指した一駒で王手に追い込み、次に相手の駒を一手指すだけで大逆転され、自分が王手に追い込まれたのです。

山本五十六は戦略・戦術が長けていたので、将棋が強かった。あと本を読んでもトランプのポーカーが得意で勝負事には滅法強い人だったのです。

山本は聾啞教育に熱心だった小西に「いずれ聾啞教育は伸び、世界一になるだろう」「私は軍人、小西は聾啞教育家、しかも日本一だよ」と言い、小西は笑ってすごしたという話があります。歴史の1ページと言われる場所がここなのです。会場のみなさんも誇りを持ってほしいと願っております。（伊藤）

5 ■柴内魁三と小西信八



柴内 魁三（写真提供：石川俊哉）

私立岩手盲啞学校（現・岩手県立盛岡聾学校）の創始者であり、同校の校長を務めた柴内魁三氏は、日露戦争で鉄砲の弾が両目をかすり、盲人となった方です。盲となった柴内を助けたのが小西でした。小西の紹介で東京盲啞学校に入学。そこで教授法を学び、岩手へ帰郷し、盲啞学校を創設したという話があります。（石川）

6 ■古河太四郎と小西信八



古河 太四郎

（「近代盲聾教育の成立と発展 古河太四郎の生涯から」岡本稻丸著より）

全国で先に聾学校を創設したのは京都で、古河太四郎が日本ではじめて聾教育の基礎を作ったことは色々な本で紹介されているし、皆さんもご存知です。歴史上、古河が聾教育をはじめたことは間違いありません。もし小西がいなければ、古河の存在が消えてしまったかもしれないと思う。小西は全国的に聾教育の基盤をつくり、誇りある仕事をなされ、苦労も過大だっただろう。確かに古河が第一だったが、小西はそれを積み重ねたので、評価は小西が上だと思います。

聾教育に関連する本を読むと古河の事はたくさん記載されていますが、小西はあまり書かれていない。古河を過大賛美しすぎではないかと思うのです。（中根）

7 ■伊澤修二

大事な事を取りこぼしたので、それを述べなければなりません。小西と古河の評価を比較するのではなく、もう一人いるのです。

伊澤修二（以下、伊澤と略）は桜で有名な場所、長野県高遠町生まれです。遊びに行ったとき、伊澤の紹介文に「東京盲啞学校長」と書かれて、吃驚しました。興味津々で調べていくと文部省で唱歌を作成したり、アメリカに派遣されたとき、ベルの電話を日本人ではじめて電話で会話した人



伊澤 修二

す。受話器を取って始めに言う言葉が「もしもし」。伊澤の場合、「申す申す」と日本人ではじめて言ったのです。又、東京芸術大学を創設、24歳で愛知教育大学の初代学長を務めた。教育に関して様々な活動を行なった人です。

（中根清）

大百科事典に「伊澤修二」の内容紹介

が驚くほどに長く載っています。伊澤は日本人としてベルに出会い、ベルが発明した電話の受話器をとって、日本語で話した最初の人でした。

伊澤が生きていた時代は、想像以上に興味のある人物が多かった。例えば、古河、小西等々。

伊澤は本当は上野にあった東京音楽学校の校長でしたが、聾啞者は話す事ができないので、聾啞者のために音楽を教える研究を進めていましたが、結局挫折してしまいました。私（伊藤）は伊澤が行なった功績を認め、高く評価しています。あくまでも参考として覚えていただきたい。（伊藤）

8 ■小西信八の伝記

小西の業績は広く深いことがわかりました。残念ながら小西の伝記が発行されていない。（新谷）

小西の伝記を長い間探してきましたが、まだ見つかっていません。今のところは長岡にもありません。山本五十六など色々有名な人物の伝記は揃っているのにも関わらず、小西だけないのです。雑誌などに小西の原稿や論文が載っているだけです。長岡人として残念に思っています。盲・聾・障害者教育関係や長岡高校同窓会などと連絡を取りながら、共同で充実した伝記を作りたいですね。私にはこういう夢があります。（佐藤）

9 ■まとめ

小西について、今までいろいろ意見や話を語ってくれました。今回わかったことは一つにまとめることは不可能です。まとめる前に皆さんに宿題を出します。皆さんが見て学んだ事を研究して、来年再び集まって、宿題を出しあってほしい。それを播りこねて分析しまとめたい。来年は無理だったら数年後でも良い、そう願っています。それが日本聾史学会の目的であり、それに向けて取り組んでいくのが仕事だと思います。有難うございました。（伊藤）